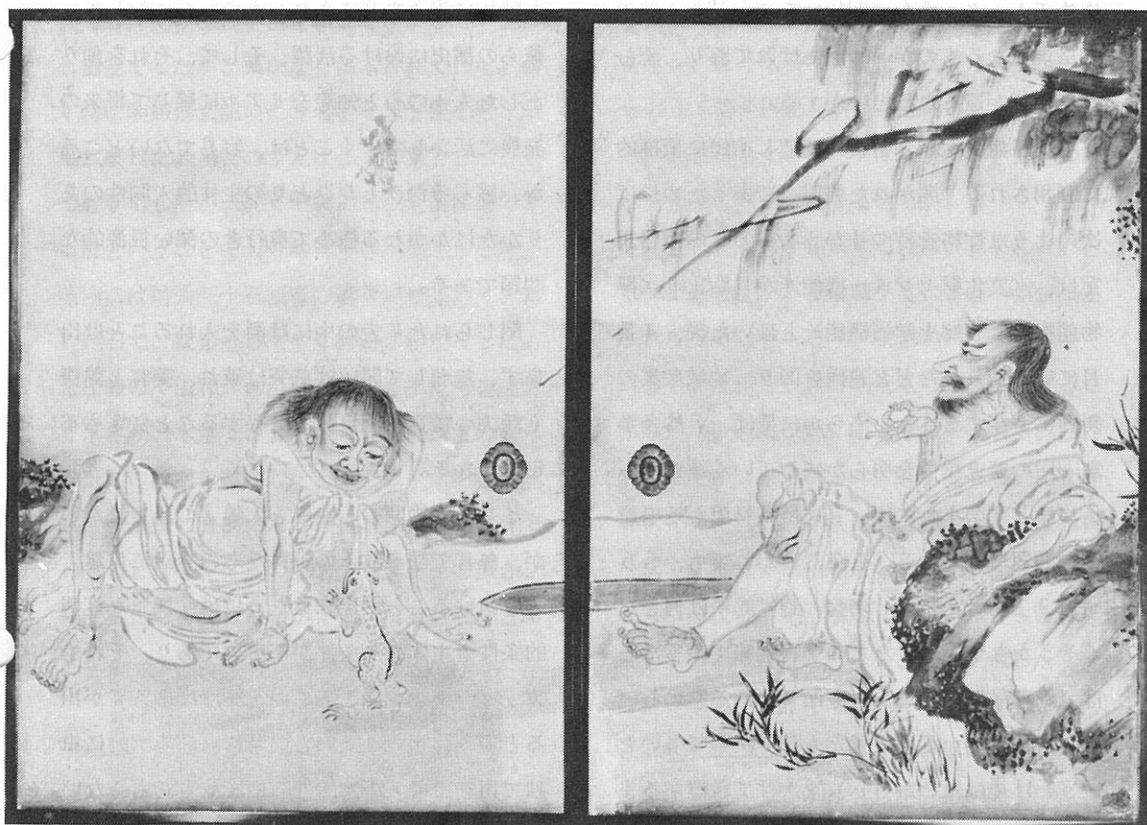


友の会だより

第4号



蝦蟇鉄拐仙人図 正住院蔵

北風と太陽

常滑市民俗資料館館長 長谷川 進

人事異動で全く別世界である格調の高い職場に来て、皆様にご迷惑をかけながらうろろうするうちに、早、半年が経つ。その間、我が民俗資料館の目的・性格・機能等を知るために開館当初発行された〈常滑市民俗資料館の概要書〉なるものを何回か読んでみた。

この概要書には、全く欲張った（よく言えば、極めてトータル性かつ開放性を志向した）館の性格規定なるものが5つもあげれており、読むたびに気が遠くなる思いがする。

『資料館が地域と密接に関連し市民に積極的に利用される“開かれた施設”であるためには次のような性格を持つ』から始まるこの性格規定は、〈文化財センター機能〉から始まり〈博物館機能〉〈郷土学習機能〉と続いた後、4番目にいわく『…などと連携を図り、地域産業の新興に寄与する。』と、高らかに掲げ、『知多半島一円の歴史民俗を明らかにしていく。』と結ぶ。

浅学非才の小生には、『民俗資料館が地場産業の振興に寄与する。』と突然言われても、『う～ん？』と考え込む。勿論、感覚的には何となくそうかなと思う。ただの懐古趣味でやるならば、骨董品業や何か秘宝館ではあるまいし、地方自治体が一定の経費と人数（決して多いというわけではないが……）をかけて設置するまでもないことは、この稼業の経験の浅い私でも想像に難くない。そして又、『地場産業の振興』ということが、常滑市の発展を意味することとほぼ同義語であるとするならば、民谷資料館もそれに寄与することを妨げるものでないことは至極当然である。が、しかし、問題はその先である。

民俗資料館が地場産業の振興に寄与するとは

具体的にどういうことなのか？

資料館に保存されているものは、誤解を承知でストレートな言い方をすれば、誰にでもちやほやされるきらびやかなものでないばかりか、今、そして又将来も一般的には使うことの無い、機能としての生命力を、時代に奪われたものたちばかりである。

彼らは、人間も含めて、冷淡な機能主義・合理主義が幅をきかせる現代社会風潮とは、相対立するものと言っても過言ではない。そのような時代に置き去りにされたものたちに対して、彼らの歴史における活躍、そして、それを創りだした人々の心と知恵をリアルに感じて将来の発展に活かしていくことは、容易でないどころか、感じる側ひとりひとりの主体の人間性のありかたにかかわる極めて奥行き深い根源的な問題である。

閉じられた革袋の中には酒を入れることは出来ず、無理して開けば革袋は破れ、美容と健康（活力）に良い酒自体を保存することさえも不可能となる。

イソップ物語の『北風と太陽』の話ではないが、無言で語る数々の資料たちの会話に自然と耳を傾けることが出来るためには、様々な客観的条件と主体的な条件が不可欠であり、それも、カップラーメンのごとく湯を注げば即答えが出るという代物ではないと同時に、超能力的に単独で出来るほど小乗的な事柄でもさらさらしない。

資料館も、『北風』ではなく『太陽』の役割の、しかもその一端を担っていかねばならないひとつの場としてのとらえかたが、館の存在原点の、〈資料保存〉と同等の重要性を持つことを痛感する。

そうした意味で、多忙な中であって、山田会長を中心として密度の濃い精力的な活動を展開してこられた、我が民俗資料館友の会会員諸氏

に深く敬意を表すると共に、今後の友の会活動のより充実・発展を大いに期待したい。

曲水の宴

山田一犁雨

さきに正住院蔵、隆古筆の襖絵展に蘭亭修禊ひいの図がありました。この絵は中国、晋の永和9年癸丑きちゆう（353）書聖、王羲之おうぎしが会稽山陰の蘭亭に、文雅の士と会し「みそぎ」の祭儀を行い、流水に臨んで曲水の宴を開き、各々詩を賦したものに王羲之がその序文を書いた。その内容を絵にしたものがこれである。この序文は書とともに文としても名高い。今度の隆古筆のこの図は彼の経歴から考えると大和絵、南宗画系というよりは、北宗、狩野派系の様式がみられ、彼の絵を考える上に極めて興味深い。この蘭亭曲水図は江戸時代に入り、蕭白、大雅、文晁、芦雪等、下っては鉄斎に至るまで、多くの著名な画家が描き秀作傑作も多い関係か、やゝ見劣りするようである。この良し悪しは兎も角として私の興味を持ったのは、画題の曲水の宴のことである。この序文の一部を要約すると、曲折した流れに各人が曲り角に座席を設け、上流から杯を流し自分の前に流れてくるまでに詩を作り杯を取って酒を飲む。『盛んな音楽がなくても一杯の酒や、一つの詩で心の中にある奥深い静かな詩情を述べるができる』とある。

古記録によれば、詩ができなかった場合は罰杯を飲ませたという。この曲水の宴に会した者のうち、二首できた者11人、一首できた者15人、詩成らずして罰酒を科せられた者が、15人もあったという。陶淵明、李白、白楽天など詩酒を友とした人たちならいざしらず、浅学か、はた又飲み過ぎて酩酊してしまったのであろうか。曲水宴の起源は漢学者諸橋博士の言によれば1、2説はあるようだが、たしかでは

ない。この序文にあるように、曲水流觴しやうの最初かもしれない。文人墨客の間で雅びた行事として後世まで続き、又一層の光を発したようである。

日本でも平安貴族の間でも優雅な遊びとして伝来し現在まで行われている。

王羲之は其の日、酔興に乗じて一気に書き上げ、其の時神助けがあり、全く人間業ではなかった。其の後、醒めてから数千本同一の文を書いたがうまく出来なかったという話である（事文類聚）。

尚、話をつけ加えるならば、この蘭亭序の真本は子孫から子孫へ、又その弟子に伝えられた。唐の太宗は、王羲之の書を極めて寵愛し、多くの筆蹟を集めたが、この蘭亭序のみは、なかなか手に入らず、いろいろと諸臣をつかって遂に手に入れることに成功し、之を禁中に入れて喜んだ。ところが太宗は崩御に臨んで子、高宗に囑して『吾れ千秋万歳の後は、この蘭亭帖は玉匣に貯え我が廟墓に蔵めてくれ』と遺言し、殉葬してしまった。これより真蹟はなくなってしまったという訳である。従って、現存するものは侍臣が臨模したもののみである。その後さらに臨模が重ねられ、次第にその面目を異にした。現今書道をやられる方は、それを又模しているということになる。

この様に中国伝来の故事、道釈人物しやく（仏教、道教などに関する超現実的な人間）の絵などは説話や起源を知って観賞すると尚、一層興味が増すというものである。

水野監物の墓

片山 忠義

一昨年5月に山田会長、鯉江俊三さん、私と3人で京都天竜寺塔頭永明院（水野監物の墓参）に行った事があります。その節、住職の国友憲

道師より、監物の墓は之だと教えられ、写真に撮って来ました。その後、昨年12月郷土史部会でその話が出た時、瀧田英二さんの名著「常滑史話索隠」の中の写真と比べて、違っている事が判明し、調査する事を約束しました。

ところが、8月の下旬に突然京都新聞の記者で田口泰彦さんと云われる方から電話があり、御本人は「京を語る会」の会長で、此の度慶長時代のお墓として、水野監物の墓を採り上げる事となり、折よく判然としなかった監物の墓が消えかけた墓碑名も拓本に依り判明し、又他の墓碑も永明院の過去帳等に依り監物の子孫のものだと判りました。それで、京都新聞に載せる事にしましたが、監物の事蹟は沢田ふじ子女史の小説「修羅の器」だけなので、参考文献があれば送って欲しい。又監物の死因は秀吉の命に依り切腹したのが本当なのですね。と念をおされました。その方が物語として面白いかも知れませんが、私は切腹なのか病死かその死因は判然としない、と答えて置き、参考資料として瀧田英二先生の史話索隠をコピーして、永明院の国友老師にお送りしますからそちらから手に入れて下さい……と、電話のやりとりをしました。京都新聞の田中さんの方へは、資料館の中野学芸員が送って呉れたそうです。そして、8月2日に国友老師から私に京都新聞の切抜きが送られて来ました。それが郷土史講座のテキストになったものです。

水野監物の歿年は慶長3年(1597)4月21日で、昭和63年(1987)は丁度390年になります。縁あって監物の事蹟を探求している私にとり、何とかして4月21日の命日には、永明院で390年遠忌供養を催し度いと願っており、山田会長にご相談しました処、友の会の行事として一泊旅行を試み、供養を行ってはどうかと言って下さいました。是非実現し度いと願

っています。皆さん御賛同下さい。

一向一揆と常滑

渡邊 榮造

今から約420年前の室町末期に、三河で勃発した松平家康(後徳川家康)に対する三河一向一揆(真宗門徒の一揆)は、家康の多くの重臣を中心とし、多数の土豪や農民を巻きこんで約3か月に亘り激戦が展開されましたが、この一揆の収拾成功によって、結局徳川家は、その基礎を確立することになります。

さて、現在半田市にある真宗の無量寿寺は、嘉禎元年(1235)に現西尾市に羽塚道場として建立されたのが始まりで、三河一向一揆で追われて半田へ建立され、今日に至っております。

この寺は江戸時代には、松平伊豆守の弟が住職に就いたことがあるとか、先代住職は大正天皇の従兄弟に当るなど、たいへん格式の高い名刹で、旧常滑には昔50戸くらい、現在でも24戸が檀家になっています。

この24戸の内、水野、関などの姓の外に渡邊姓が13戸と過半数を占め、その殆んどが北条地区の人々です。

東海地方の渡邊姓は、渡邊綱の子孫に当る渡邊源次道綱が、摂津から三河へ来て、現在の岡崎市下青野町付近に城を築き、周辺7郷の領主になったのがその発祥で、三河一揆には道綱の4代目に当る渡邊半蔵守綱を総師として、渡邊姓の武将12名が一揆側で戦いました。

一揆終息後、家康の譜代に取立てられた者もある反面、追放された渡邊姓の武将もありますので、旧常滑付近の渡邊姓は、その時三河を退去した渡邊性の流れをくむ人達の子孫と思われます。

半田市の小栗、伊藤姓は一揆の落武者の子孫といわれているように、常滑市の北条付近は、

三河一揆より100年も前に建立された保示の正住院の檀家が大多数を占めているのに拘らず昔から距離の遠い成岩の無量寿寺の檀家になっているのからみても、その多くが三河の一向一揆に、何らかの関わりがあると考えるもよいかと思います。

三河の一向一揆から丁度7年後の、元亀元年(1570)に、伊勢長嶋の一向一揆が勃発します。長嶋一揆は織田信長の大軍との間に4年近く激しい攻防が繰り返されるわけですが、三河の一揆とはその規模も内容も異って、本格的な戦闘と、2万人の老幼男女が焼き殺されるという惨劇になります。

長嶋滅亡の天正2年(1574)には常滑城主の水野監物も滝川一益や九鬼の水軍に加わってアタケ舟で伊勢湾から長嶋を攻めましたが、蟻のはい出るスキも無い海を渡って、密かに大野の光明寺を頼って脱出した何人かの一向宗徒がいたといわれます。

従って、常滑市大野付近の多くの真宗の人々のご先祖の中には、長嶋一向一揆の落武者がいることは間違い無いようです。

ともあれ、400年前先祖たちが遭遇した三河と長嶋の一向一揆が、今も常滑に真宗を通して、かすかにその痕跡を残していると言っても過言ではありません。

木型考案の功労者

大工久田平太郎と

製陶用木型の歴史

村田 正雄

常滑市民俗資料館に収蔵されている資料の中で、「明治元年アノ平太郎作」と、墨痕鮮やかに記名されている水引き用の手廻しロクロがあります。然し、その紀年銘が記されている場所はロクロ盤下の心棒上部凹面であるため、その

個所の木組みを解体しなければ紀年銘を見る事は出来ません。

久田平太郎は瀬木村の宮大工、棟梁片岡定右衛門へ弟子入りして修業したが、その技量は稀に見る優れた腕を持っており、今でも常滑市内の各所に平太郎の作った立派な物品や建物が残っております。

平太郎が作ったものの中で最も価値あるものは、有名な「はつき土管(ソケット付き土管)」の木型であるとされています。明治5年に平太郎は、師匠の鯉江方壽から真剣な相談を受け、瀬木村の鯉江佐太郎たちと日夜休む間も無く研究を重ね、遂にははつき土管が製作出来る木型を考案致しました。

木型が出来た時によって、それからは規格土管の生産が可能になり、横浜の居留地へ下水管を大量に納入する事が出来、良好な排水工事の成功によって、以後各地や各方面から注文が相続き、土管王国常滑の基盤が出来上って来ました。

久田平太郎が土管の成形木型を発明した事によって、それからは他の各種製品も木型で製作出来るようになり、常滑陶器の成形技術面に革命をもたらす事となって来ました。

木型成形の新技术は、先ず焼酎瓶という新商品の生産を可能にしました。次いで、植木鉢、火鉢などの鉢物、輸出陶器の大物類、衛生陶器(便器)なども量産を可能にし、当時の常滑窯業経済は大きく発展をして来ました。

ところで、それまでは手造り成形の時代でしたが大正時代になってからは電力による機械成形の時代になり、木型による成形方法は増々拡大されて来ました。即ち、常滑式ローラー土管機が研究開発され、土管機に木型を取り付けて各種の製品が製作されるようになり、タイル、テラコッタなどの建築陶器の製作も木型を使用し、

生産されるようになって来ました。

以上のように、常滑焼が木型成形を主流とした量産方法に大成功して、今日の常滑窯業経済が築き上げられて来たその輝かしい歴史をふり返って見る時、今更ながらに久田平太郎のはづき土管木型発明の仕事が、如何に偉大なものであったかを知る事が出来るかと思えます。師匠の

鯉江方壽は、弟子久田平太郎に「方受(まさつぐ)」の称号を興えて、その労を心からねぎらいました。

平太郎の墓は、西阿野の称名寺下にある共同墓地に祀られ、「故久田方受墓」とはっきりとした字で刻まれ、安らかに眠っております。天保14年生、大正13年5月7日死去、82才。

上白田古窯出土の玉縁口縁碗について

常滑市民俗資料館 学芸員 中野晴久

昭和62年の晩秋に約一月半の期間をかけて発掘調査を行った市内金山字上白田地内に位置する古窯は、発掘する以前から知多半島の中世古窯の中では珍しく瓦の出土が知られており、調査の成果が期待されるものであった。そして、我々の予期に違わず発掘を進める過程で軒平瓦片や丸瓦、平瓦といった瓦類や片口小杯、特殊台付小杯など過去の知多古窯の発掘品の中でも類例の乏しい貴重な資料が確認され調査員の胸をときめかせたのであった。

11月14日の発掘終了と同時に検出された2基の窯は、圃場整備の名のもとに大型ブルドーザーとスクレーパーの餌食となって消滅していき我々の調査は、出土した遺物の整理作業へと移って行った。出土品の水洗い、復元、実測作業を進めていく過程で、我々はそれまでさほど注意を払って見ていなかった山茶碗の破片の中に一風変わったものが含まれていることに気が付いたのである。それはまったくの偶然であったが、偶然の結果は必然になるように今にしてみれば、あの水にぬれたかけらは、必死になって私を呼んでいたのであり、私とかけらはそこで出会ってしまったのだと言えよう。

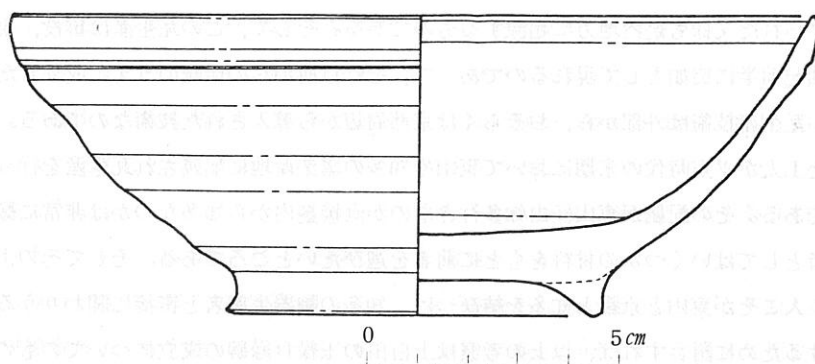
全体の形は、普通の子茶碗とさほど変わらないのであるが、その口縁部の外面下部に一条の浅い沈線を巡らし、かすかに受け口状に口縁を膨らませたこの種の碗は、玉縁口縁碗と呼ばれるもので知多半島の中世古窯の中では東浦町の石浜第1号窯から1点出土しているだけの極めて珍しい資料なのである。そして、あらためて上白田古窯の出土遺物を見直してみると、この玉縁口縁碗の破片は、かなりの数あり個体数を復元してみると大小合わせて5～6個体にもなることが判明したのである。

考古学研究者の間で玉縁口縁碗の存在が知られるようになったのは決して古いことではない。管見に触れる限りでは、昭和56年の秋に愛知県陶磁資料館で開催されたシンポジウム「平安時代の土器、陶器」の席上、柴垣勇夫氏が発表されたのが最初である。柴垣氏は、猿投窯周辺で少量ながら見られるこの玉縁口縁碗について平安京左京四条一坊や太宰府SK-976出土の中国陶磁の白磁碗と同じ形の口縁をもつものがあり形態的にも類似していることから、猿投窯周辺で平安朝灰釉陶器の最末期から中世山茶碗窯の初期(西暦1075～1150年)の期間に、それまでの灰釉陶器工人在中国越州窯の青磁碗を模倣していたのに対し、新しく我国にもたらされた北宋後半期の白磁碗をあらたに指向し工人内の生産活動の内容が変質しはじめ、中世山茶碗窯へと移行する現象の一つの指標であるとされたのである。

過去、この地方で玉縁口縁碗を生産していたことが確認されているのは瀬戸市の鉢割1号窯、百代

寺古窯、広久手E窯、南山8号窯、名古屋市の東山61・79・105号窯、三好町の八和田山1・2号窯、東浦町の石浜第1号窯などがあげられる。

上記の窯のうち、瓦を焼成しているのは東山61号窯だけであるが鳥羽離宮東殿との関係から12世紀前半に位置付けられており、上白田古窯もほぼ同時期の操業であったことは別の遺物からも推定できるのである。しかし、東山地区のように平安期からの陶器生産の伝統があった地域とは性格を異にする上白田の工人たちは、どのようにして京都あたりで新しくもたらされ流行しだした碗の情報を知り、それを模倣したのであろうか。ここで考えられるケースを挙げてみると次のようになる。



上白田古窯出土の玉縁口縁碗

1. 猿投窯の東山地区は玉縁碗の他にも瓦、三筋壺、片口小碗、短頸壺、広口長頸瓶など知多古窯と生産内容がよく似ており、しかも年代的にみて知多よりわずかながら古く位置付けることができる。上白田の工人たちは、東山からやってきたのであろうか。あるいは工人のレベルで東山との交流があったのであろうか。
2. 玉縁口縁碗に限ってみれば上白田の工人が直接京都あたりに出向き新しい情報を入手してきたと考えることもけして荒唐無稽な説とはいえない。伊勢との海路はそれ以前に存在していたことは間違いなし、知多古窯の製品は京都方面に多くもたらされているのである。とりわけ瓦においては、その性格が強い。
3. 工人のレベルとは別に、新しい情報をもたらすような人々が存在し、彼等によって時代の流行が生産地にもたらされたと考えることも魅力的な想定である。勸進僧や商業民など諸国遍歴の民が介在することで生産地に時代性が反映されたとみるのである。実際、知多古窯の経塚関係製品の成立した背景には、このような事情があったはずである。

現時点で考えられる可能性は、以上の三点くらいであろう。そしてこの三点のいずれが正しく、またどれかが間違っていると断定することもできないのである。残されるのは、それぞれの要素の可能性に対する検討であろう。

1については、上白田において少量ではあれ麿や広口壺のような東山でみられない器種を生産しており、直接的な工人の流入の可能性は少ないと思われる。窯の構造にしてもかなりの相違点を指摘することができるのである。2については製品の運搬が工人自身の手で行われたとはいいきれない。

また、瓦生産については国司層の介在が考えられ、運搬においてもその方面の人間がかかわっていたとも考えられるのである。3については遍歴民との関係を何によって証明するのが大きな問題である。経塚関係については、渥美窯の製品や経筒に刻まれた銘文から推測しうるのであるが、玉縁口縁碗には宗教性も乏しく、性格がいささか違うのである。(もっとも、その使用例については今のところ判然としてはいないのであるが)

このようにみえてくると1、2、3のいずれともかかわるような最大公約数的存在がいまのところ最も実態に近いのではないかという思いが浮かんでくる。そこで注目されるのが上白田古窯出土の瓦である。瓦の成形技法は壺や甕あるいはまた碗、皿などともまったく異質なものであり、軒先に用いられる瓦に付けられた文様も畿内地方に起源するものである。そして、この瓦生産は猿投、東山窯においても12世紀前半に突如として現れるのであって、それ以前からの伝統のうえに成立したのではない。従って、瓦生産技術は外部から、おそらくは京都周辺から導入された技術なのである。その技術を身に付けた工人が平安時代の末期において東山や知多の窯業産地に配属され瓦生産を行ったものと思われるのである。その配属が東山経由知多行きなのか直接畿内から知多なのかは非常に微妙な問題であるが筆者としてはいくつかの材料をもとに前者を選びたいところである。そしてそのように想定すれば、瓦工人こそが東山と京都と知多を結びつけ、知多の陶器生産者と密接に関わりうるのである。

誤解を避けるために附言すれば、以上の考察は上白田の玉縁口縁碗の成立についてのものであり、瀬戸や東山のそれにそのままあてはまるものではない。また瓦工人が玉縁口縁碗を作ったのだというものでもない。あるいは、その可能性もありうるのであるが、その問題はもう一段先のテーマである。ここで示したのは、新しい形はどのようにして成立したのかということである。無から有は生れてこないであり、新しいものにはそれを新しいとする共有されたイメージが必要である。瓦工人はとりあえずその新しい碗のイメージを上白田にもたらした主役であったと考えるのである。

一片の碗との出会いから、いろいろな事柄が浮かんでくる。そしてこれまで築きあげてきた考古学的な構成は、組替えが求められるのである。そして、この組替え作業は、遺跡が無くなるまで際限もなく続いていくのである。



発掘された
上白田1号窯の窯体

犬山行

すばらしい秋日和です。セイタカアワダチ草が黄色に咲き乱れ、所々に柿が木いっぱいこぼれるように色づいていて楽しませてくれる。正に秋の中を先づ岩田洗心館に着く、犬山市役所の裏手にあり、小じんまりした所、個人の所有を美術館にしたのだという。前田青邨、川合玉堂、堂本印象などよく知られて近年に亡くなられた方の作品は、身近に感じられるし、呂宋四耳壺は、遠く船で運ばれて来たと思われ、助左エ門が活躍した頃が偲ばれる。書画十数点、茶道具二十点余り、ほかに犬山焼など、パンフレットを見ながら、館の方の説明を聞く。次に犬山城へ行き、丸い石を敷きつめた坂を登って



城門に着く。昔の侍は毎日この坂を登り下りしたのだろうか、少し息が弾む。「涼しさを見せてやうごく城の松」丈草、の碑がある城門に入って紅葉した桜の木陰にて昼食を取る。久しぶりに外で食事でも気持ちよい。靴をスリッパに履き替えて、急な階段を一つ登ると石垣があり、横に渡された柱の太いこと、天守閣をしっかりと支えていると感じる。場所を取らない為にか、階段はすべて狭く急である。手摺にしっかり掴まって登る。日本最古の木造のお城と云われ、国宝である。その国宝の中を我々は歩いている

と思うと少し緊張する。しっかりした木で作られたお城は、北側が木曾川の広い流れの向うに、昔は無かったであろう住宅がびっしり建ち並ぶ。西側、南側も住宅が続き、その向う西南に小牧山、東南に尾張富士など、東側の近い所に成田山のお寺があり、遊園地も見える。天主閣の最上段からの眺めは絶景で殿様気分になれるが、昔はこんなに家が建てこんでなくて、静かな町であった事と思う。今は賑やかな現代の町並である。1階ずつ、ゆっくり展示品等を見て、連子窓から外を見ると、城の屋根の端に鬼瓦がつく所に、桃の一枝をつけた瓦があった。桃太郎にゆかりの土地だからというのであろうか。次は文化史料館へ向う。お城のすぐ近くで、入るとすぐ立派な山車が飾ってある。立ちの高い三段の山車で、二階からは上段の唐子人形などもよく見える。犬山城のすぐ下にある針綱神社の祭礼に引かれるそうで、十三台あるそうだ。又展示場では、「戦国の武将その生活と文化展」として、信長、秀吉、家康、成瀬正虎等の画像が飾られ、鎧、具足、刀や鎗等、又信長、家康、清正等の書状が展示されていて、強者共が夢の跡を偲ぶ。別館には入口に、昔の手押消防ポンプ等が置かれ、中には庶民の生活用具などが整頓されて並べられている。犬山焼の人形とか、蚕の糸繰り鍋から、糸巻き、織機までとか、盛んであった産業の道具、それに一升徳利が何十個か、ずらりと並ぶ。石上げ祭の石もあり、又馬の蹄鉄が沢山あったが、以前は馬が沢山飼われていたのか、外の入口には、すべり止めに蹄鉄が敷きこまれてもあった。我々の世代にとって、昔の生活の懐かしい品が並べてあり、ゆっくり見て廻り楽しみました。 増田 静子記

◇部会報告◇

◎交 換 会

11月2・3日 資料館講座室にて盛大に実施されました。



◎陶芸美術部会

今年は古窯発掘の現場を二度見学しました。七月、暑いさかりに武豊の山茶碗窯を谷川省三さんの案内で、十月、北高正門前の平安末期の山茶碗窯を資料館の中野学芸員の解説つきでたずねました。

いずれも開発行為で発見され、調査が終ると取りこわれてしまう運命にあります。北高の方はパイロット事業で、すでにあとかたもなくなっています。

武豊の方は山の北と南の傾面に五、六基づつかたまって、三ヶ所、約十五、六基発掘されていましたが、現在尚一ヶ所掘られていて、近くの山も含めると四十基近くはありそうだとのことです。

昨年の上芳池古窯の場合もそうですが何基もかたまって発掘された現場は、足をふみ入れただけで、異様な興奮におそわれます。赤く焼けた窯の壁。今にも落ちそうな分焰柱とアーチ。

傾面をよじ登るとくくり形の炉体のカーブ。とりわけトレンチ用のミゾが切っている場合など強い陽ざしの中でのコントラストが強烈な印象をあたえ、ただその場に立っているというだけで、云い知れぬ感動におそわれます。血がさわぐとでも云いましょうか、私たちの中の焼物屋の血が、古代から連続と続いている、物造りの習性が目ざめて来るような気持になります。誰が、どのような生活をしながら、どんな思いでこの場所で窯を焼いたのか。残念ながら、今私達が知ることのできる学問の成果の中からは、こうした素朴な疑問、「人間」に関してはひとつも答えてくれません。

陶芸美術部会の来年度の課題は、学者が恐れて手を出しかねている「人間」の部分に、アマチュアはアマチュアらしく果敢に（盲へびにおじずの声あり）取り組んでみたいと考えています。

ところで、北高前の発掘現場を訪ねたときのことです。現場は池の南だれにあり、ひとわたり説明を受けた後、ふと池の北傾面を見ますと、タタミー一枚ほど水ぎわが赤い色をしています。よもやと思って近ずいてみると、今ではほとんど見かけなくなったモウセンゴケの群落です。

花かと思えたのは虫を取る葉で、真中からか細い茎が出ていて、その先に、鉛筆の先ほどのピンクの花がついています。

やがてここもブルドーザーが入ってならされてしまうのだなあと思うといてもたってもいられなくて、よし、近いうちにどこかへ移植してやろうと決心しました。

しかし、時間が取れてやって来た時には、もう池はあとかたもなく、厚い土の下になっていました。

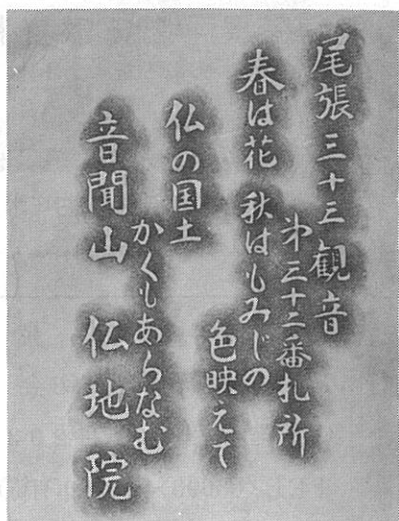
今私たちは開発という名で、名もない貴重な生きものや、先人の生きたあかしを破壊しています。

生きものを粗末にあつかったり、歴史や伝統を軽ろんずることは、取りもなおさず、私たちの現在を否定していることの様に私には思われ
てなりません。 杉江重剛

◎拓本部会

拓本部会は、10月10日、グループ拓游会と合同で野外での採拓学習をおこないました。すこし曇空でしたが、風がなく拓本日和でした。朝7時に陶磁器会館前に9名(うち女性1名)が集まりました。当初の予定は、南知多方面へ行くつもりでしたが、近くで参加者が全員採拓できる所ということで大野町齊年寺へ行きました。境内には尾張三十三観音の歌碑が33基あり、新しい石で、採拓もしやすく最適な場所でした。

住職の下山和尚さんが気持ちよく私たちを迎えて下さり、本堂で、齊年寺の由来や国宝の雪舟の掛図の説明を聞きました。宮山城(大野城)の城主佐治氏の寄進になる菩提寺で由緒ある寺であることなど、又奥の院まで見学させて頂き、郷土文化財を見ることができ、有意義なひと時



を過しました。その後、それぞれが、好みの歌碑を採拓することに熱中しました。参加の仲間は、互いに道具を借りたり、手際よい作業ぶりを批評したり、また共に手伝いながら指導してもらったりして楽しい野外学習でした。それぞれが3~5枚採拓したところで、大野川をながめつつ寿し屋で食事をとりながら親睦を深めました。

昼食後、大野町一味堂境内にある芭蕉の句碑を共同採拓をして解散しました。

拓本部会は、月1回学習会をおこなっておりますが、12月例会で、村田部長は何かテーマをもって部会活動を発展させたいと語られました。会員みんなでテーマに取り組み、拓本の展示会を開こうではありませんか。

野外にある碑を拓本するのは、気候の良いときはよいですが、夏は朝早く、またやぶ蚊にさされて採ることもあり、突然の風に、せっかく八分どおり出来かけていたものを駄目にすることもあり、満足のいく拓本はなかなか採れないものですが、市内には、歌碑をはじめ、記念碑、郷土のために活躍した人の頌徳の碑など沢山あります。趣味で始めた拓本で、拓本部会の仲間と共に、技術ばかりでなく、古い歴史の背景を持つこの地に住む者として、先祖が残した文化財を守るということの何かのお手伝ができれば、どんなにかすばらしいことかと思えます。

拓本をやってみたいとお思いの方の入会を歓迎致します。ぜひご参加下さい。 桑山亀義

◎郷土史部会

市民病院の桑山次長さんは、かねてより市内に点在する道標に興味を持たれて、刻明に探し出し、カメラに収め、記録を残されております。郷土史部会では、それを展示して解説をして戴きましたが、それは研究のホンの一端を伺った

のみであり、まだまだ広く且つ深い知識をお持ちの様子と拝察しますので、皆様の御要望があれば、再び御都合の良い時を選んで、解説をお願いしたいと思っております。

又、中野健三先生には、資料館の特別展で「世界の切手展を開催していただき、郷土史部会で「伊勢湾の海運事情」の一端を解説していただきましたが、之れ亦、機会をとらえて、もっと広汎な視点からの解説をお願いしたいと存じております。常滑城と水野監物に就いては、別項にてお話し申し上げたい事がありますのでその時に譲り部会の報告とします。片山忠義

常滑市民俗資料館友の会

(2月部会のご案内)

2月14日(日)

拓本部会 AM10:00～「拓本実習」

古文書部会 PM 1:30～「解説実習」

2月28日(日)

陶芸美術部会 AM10:00～「須恵器」

郷土史部会 PM1:30～

「新年度研究テーマについて」

不識の壺について

民俗資料館

友の会会員の皆様へ

会員更新及び新規加入申し込みについて

62年度民俗資料館友の会会員の有効期間が、昭和63年3月末日までで期限切れとなりますので会員更新の手続きをして頂きますようご案内致します。又、お知り合いの方々にも広くご勧誘下さるよう合わせてお願い申し上げます。

○更新(新規加入)受付 昭和63年3月10日より

○受付場所 常滑市民俗資料館

○持参するもの

年会費 1,000円 更新の際には旧会員証

表紙紹介

愛知県指定文化財 正住院蔵

高久隆古 襖絵展

常滑市保示に所在する龍松山正住院の大書院には、高久隆古(1800 - 説に1810~1858)の描いた襖絵や衝立が全部で73面伝わっている。この作品群は、一括して昭和30年6月6日に愛知県の文化財に指定されている。その内のGamma仙人図である。

高久隆古の生涯については、未知の事柄が多くほとんど記録が残されていない。わずかに残された資料によれば、隆古は下野(今の栃木県)に生れ、江戸で谷文晁の高弟依田竹谷、高久龔厓に師事して南画を学び高久家を継いだといわれる。さらに復古大和絵を学ぶべく京都に上がり浮田一恵の門下に入り、その技法を修得したとされる。また、その間に尾張に立ち寄り渡辺清に学んだという伝えも残されている。

企画展のご案内

わがやの歴史展

常滑村庄屋 肥田家資料

会期

昭和63年3月1日(火)～

63年3月31日(木)

投稿される方へ

論旨を損なわない範囲で補筆する場合があります。原稿は返却いたしません。ご了承ください。

昭和63年2月1日発行

発行 常滑市民俗資料館友の会

常滑市瀬木町4丁目203番地

TEL <05693>4-5290(有線)54-429